幽霊はニヌがお好き

赤川次郎

中央公論社

幽霊はテニスがお好き

赤川次郎

中央公論社

幽霊はテニスがお好き

一九九五年一二月二五日初版印刷
一九九六年一月七日初版発行

著者　赤川次郎
発行者　嶋中行雄
発行所　中央公論社
〒104　東京都中央区京橋二-八-七
電話　販売部〇三（三五六三）一四三一
編集部〇三（三五六三）三六六四
振替　〇〇一二〇-四-三四
印刷　大日本印刷
製本　大日本印刷

Printed in Japan　©1996 Jiro Akagawa
ISBN4-12-002331-4 C0093
定価はカバーに表示してあります。
落丁本・乱丁本はお手数ですが小社販売部宛お送り下さい。
送料小社負担にてお取り替えいたします。

目次

本日も死亡ゼロ　5
白馬の王子　49
金メッキの英雄　97
待ちわびる女　141
逃亡の果て　183
幽霊はテニスがお好き　227

装画　東堂鷹仁

装丁　安彦勝博

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

幽霊はテニスがお好き

本日も死亡ゼロ

1

その冗談がいけなかったのかもしれない。

「町長！　気を付けて下さいよ！」

と、酔った大声でわめいたのが誰だったのか、後になっていくら考えても、本宮には分らなかった。

「町長！　気を付けて下さいよ！」

と、その声は言ったのだ。「町長が自分で事故起こしたんじゃ、冗談にもなりませんからね！」

――そう。実際、冗談にはならなかったのである。

それはともかく、本宮三郎は六十五歳。今、このK町の町長をつとめている。五十五歳のときに町長に当選して、もう十年。

「おい、車は？」

本宮は、いささか酔った、もつれ気味の舌で部下に訊いた。
「待たせてあります」
と、眼鏡をかけた実直な部下は言った。「ただ……」
「何だ？　タイヤが外れてるか」
自分の下手なジョークに大笑いする。
「いえ、そうではないんですが……。運転手が手違いで帰ってしまいまして」
と、その部下、田丸は怒鳴られるのを覚悟している様子で、「申し訳ありません！」
「あ、そうか。うん、ま、いいよ」
と、本宮は手を振って、「俺が運転して帰るよ」
「いえ、町長！」
と、田丸はあわてて言った。「それはいけません」
「どうしてだ？」
「酔っておいでなのに……。もし捕まりでもしたら――」
「馬鹿言え」
と、本宮は笑って、「いいか、俺の家はここから町の外へ向って行くんだ。ほとんど町の中は通らん。しかも時間は……夜の十一時だぞ。誰かが通ってると思うか？」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

「いえ、ないとは思いますが……」
「気にするな！　ちゃんと車ぐらい運転できる」
本宮は、町の公会堂の玄関先に停(とま)っている公用車へと歩き出した。
「あの――町長。でもやはり……」
田丸はなおもしつこく追ってくる。
「じゃ、お前、運転しろ」
と本宮が言うと、田丸はぐっと詰った。
田丸は三十そこそこの若さのくせに、免許を持っていないのである。
「それは……」
「大丈夫だ。冗談だよ」
と、本宮は豪快に笑って田丸の肩を叩いたのだった。
田丸も、これで諦(あきら)めることになったが、
「くれぐれもご用心を」
と、しつこく念を押すのは忘れなかったのである。
本宮は、車を操って大通りへ出た。
この小さな田舎町では、夜も九時を過ぎると、ほとんどの店は閉まり、まるで真夜中の

ように静かになる。
本宮は、一旦町の外へ向ったが、途中、細いわき道へ曲ると、さらにその先を折れて、町の中心へと戻る格好で車を走らせた。
何しろ町長の公用車である。町の大通りを走れば目立つに決っている。わざわざこうして裏通りを走っているのには、理由があった。
その家の裏手に静かに車を停めると、すぐに家の窓のカーテンが開いた。
本宮が車を出て、その家の庭へ入る低いくぐり戸の方へ足を進めると、タッタッとサンダルの音がして、すぐに戸がガラッと開いた。
「遅かったのね」
と、女の甘えた声が本宮の耳をくすぐる。
「パーティがなかなかすまないんだ」
本宮はくぐり戸を入ろうとして、額をぶつけた。「いてえ!」
「気を付けて。——ご近所が気付くわ。早く入って」
本宮はさっさと上り込んだ。
「ずいぶん飲んだのね」
と内山悠子は顔をしかめた。「いやだわ」

「なに、じきさめる」
と、本宮はソファに寛(くつろ)いで、ネクタイを緩(ゆる)める。「ちゃんと車を運転して来たんだ。しっかりしたもんさ」
「じゃ、しっかりしてるとこを後で見せてよ」
と、悠子は笑った。「何か飲みます?」
「お茶でいい。もう……酒は充分だ。それと――お前とな」
本宮が悠子の腰へ手を伸し、悠子は笑ってスルッと逃げた。
「もう! せっかちなのね」
「どっちがだ」
本宮は声を上げて笑った。
――内山悠子の亭主は、単身で東京へ出ている。仕事の都合で、あと二年くらいは帰れそうにないのである。
帰宅はお盆と正月のみ。子供のない夫婦で、悠子は四十五歳の女ざかり。時間を持て余して、いずれ他の男に手を出すのは自然の成り行きだった。それでも東京へついて行かなかったのは、夫が「物価高の東京へ来たら、貯金などできない」と書いて来たからである。

本宮に言わせれば、「退屈で死にそう」な人妻を救うのも「町長の役目」の一つということになろう。――実際、同い年の妻が相手では、ほとんど「燃える」ことのない本宮が、悠子を抱くときには、六十五歳が相手に合せて四十五くらいになるようだ。

「――はいお茶」

と、悠子はソファに並んで腰かけて、「何のパーティだったの、今日？」

「五年さ」

「五年？」

「五年間、町内の交通事故の死亡がゼロになったんだ！」

「ああ……」

悠子は肯いて、「じゃ、今日がその日？」

「正確に言うと明日さ。月末だからな。しかし、もう同じことだ。明日になると、出かける連中も多いんで、今夜パーティをやることにしたんだよ」

と、本宮は上機嫌で言った。「見ろ！ これで俺も新聞にのる」

「おめでとう」

悠子はそう言って、「じゃ、今夜はその記念ね？」

と、本宮の方へ体をすり寄せた。

本宮は悠子の体を抱き寄せた。――確かに、六十五歳にしては本宮は充分にタフで、悠子を満足させていたのである……。

五年間、死亡事故ゼロ。

これは、本宮が町長になったときからの悲願だった。オーバーな言い方かもしれなかったが、初めは「一年間」も達成できず、何回もかけ声だけに終っていたのだ。

それが――五年間、交通事故の死亡がゼロ！

五年間という期間にこだわったのは、これで県知事から表彰を受け、その様子が新聞に写真入りで掲載されるからだった。

K町は、どこといって特色のない、小さな町である。こんなことでもなければ、この県内の人間でも、ほとんど名を知らずにいるだろう。

たとえどんなことでも、「K町」の名を印象づける必要があったのである。

加えて、本宮は十年目の町長で、もう今年でその職を退く。十年間は、町の規則で決めた最長の任期だ。

その最後を飾るには、「五年間死亡事故ゼロ」の達成は、全くふさわしい出来事だったのである……。

「――じゃ、また」

と、車に乗って、本宮は悠子に手を振った。

「気を付けて。また来てね」

悠子は、ちょっと手を上げて見せた。

本宮は車を我が家へと走らせた。――少し悠子の所にのんびり居すぎたかもしれない。しかし、まあ「付合いで飲んでた」と言えば何とか通用するだろう。妻の克代は、あんまりそんなことをうるさくは言わない。

もう午前二時か。――こんな時間まで、ただ飲んでた、ってのは無理がある。こんなに遅くまで開いている店は一つもないのだ。

どこかへ上り込んで飲む内に眠ってしまった。これにしよう。

そうだ。あの田丸の奴にでも言い含めておくか。あいつは独り暮しだから、厄介なこともあるまい。

本宮は町の外、少し小高くなった土地に家を持っている。――町を出て、少しスピードを上げた。

大丈夫とは思っても、克代に対して後ろめたい気持があるので、つい急ぐのだ。

そして……。ゆるい角を曲ったときだった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.